掲載日:2024年06月20日, 面名:教育, 記事ID:KIJ20240620_A0006000102601005
(C)十勝毎日新聞社

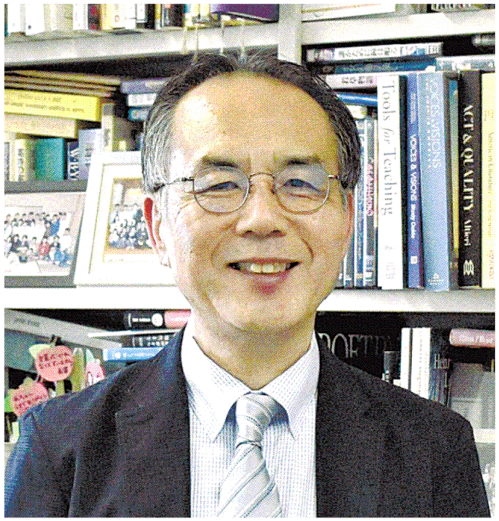
未知の世界広がる 英米文学

研究は面白い！ 大学教員に聞く ―㉗

札幌学院大学 中村敦志教授（66）

札幌学院大学人文学部英語英米文学科の中村敦志教授は、アメリカ文学と映画、アメリカ詩を研究テーマに持つ。ミュージカル「キャッツ」の原作詩の作者T・S・エリオット（トーマス・スターンズ・エリオット）の研究に長年力を入れており、7月に書籍で発行される「T・S エリオット研究年鑑」第6巻に中村教授の論文が掲載されることになった。英米文学に興味を持った経緯や研究内容などについて聞いた。

（聞き手・安藤有紀）



なかむら・あつし　1958年生まれ。兵庫県出身。甲南大学文学部英文学科卒。同大学大学院人文科学研究科修士課程、博士後期課程修了（英文学専攻）。高校・大学での非常勤講師などを経て、87年から札幌学院大学へ。現在は人文学部長も務める。

―文学部に進んだ経緯は。

高校時代の読書量はそこまで多くなかったが、文学作品を読んでその奥にある隠れた意味を知りたい、もっと深く読んでみたいと感じたことが文学部に進むきっかけになった。英語をもっと勉強したい、英語の本の原作を読みたいとの思いもあった。

―大学での研究は。

英米文学にのめり込んだのは2人の先生の影響が大きい。一人はイギリス文学の先生で英語詩が専門だったので、初めてエリオットの詩を原書で読んだ。当初はとても難しくお手上げ状態だったが、何か引かれるものがあった。もう一人がアメリカ文学の先生。イギリス文学とは全く違う視点だったのでとても新鮮で、さらに興味を深めた。

ゼミの様子。「ワンダー」の原作と映画を比較し、疑問点について意見を交わす

―現在担当している授業は。

1年の「英米文学への誘い」と3年のゼミを担当。英米文学を読んだ経験のある学生はほとんどいないので、最初は入り口として映画化された作品を扱うことが多い。原作と映画を比較し、疑問点を出してグループワークで意見を出し合う。今年度はまず米国の児童文学「ワンダー」「穴」を読んだ。扱う作品は学生の意見を聞いて決定している。

―英米文学の魅力は。

未知の世界に遭遇し、それを探究できる点。いろいろな作品に出合い、答えのないものを考えていくところに面白さがあり、自分なりの解釈を重ねて解き明かせた時は大きな感銘がある。言葉も文化背景も日本の作品とは異なり、分からないことが多いのは当然。しかし、その中で共通する部分や理解できる部分を見つける喜びを学生たちにも伝えたい。

―エリオットの研究とは。

「キャッツ」の原作詩の初版は1939年で、最初は14編で構成されておりミュージカルにも使われているが、53年に15番目の詩が加わった。これだけの時を経てなぜ新しい詩を加えたのかずっと気になっていた。また、エリオットが生前、交際女性と文通していた際の手紙が残されていて非公開となっていたものが、2020年にエリオットの遺言に従い公開された。それを読み15番目の詩との関連を発見し、論文を執筆した。今回、新たな見解を示すことができ、世界の研究者が最先端の研究を発表している刊行物に載せてもらえてとてもうれしい。

―十勝の印象と中高生へのメッセージを。

本学を卒業し教員になった教え子が多くいることもあり、十勝は進学相談会などで毎年訪れている。十勝から入学してくる学生たちも純粋で学ぶ意欲が強く、卒業後も活躍している。

中高生のうちは自分の視野を広げ、さまざまなことに興味を持ってもらいたい。大学で何を学ぶか今から決めるのは難しいかもしれないが、幅広く知っていくうちにその中で自分のやりたいことが見つかるのではないか。また、私の今回の論文掲載のように、興味のあることを長く続けていればチャンスが巡ってくるかもしれない。諦めずに努力し続けてもらいたい。